障害者と地域の共生 前へ

相模原殺傷 1ヵ月

全国手をつなぐ育成会連合会 久保 厚子会長

相模原事件について語る久保会長
＝長崎市茂里町、長崎ブリックホール

知的障害者や親ら約1300人が集う九州地区手をつなぐ育成会県大会が27日、長崎市で2日間の日程で始まった。来県した「全国手をつなぐ育成会連合会」の久保厚子会長(64)が長崎新聞社の取材に応じ、発生から26日で1カ月となった相模原市の知的障害者施設殺傷事件について「とんでもない事件が起きたからこそ、障害者と地域との共生を前に進めなければならない」と語った。

久保会長は全国約25万人の会員を束ねる。大津市で知的障害者施設を運営。長男(41)は重度の知的障害があり、発達の遅れが影響し言葉を発することもできない。だからこそ、「ひょっとしたら被害に遭っていたのは自分の息子かもしれない。事件は人ごとではない。許せない」と心の底から思ったという。

事件では19人が刺殺され27人が負傷。元施設職員で、逮捕された植松聖容疑者は「障害者は不幸をつくる人たちだ」「役に立たない」などと供述しているとされる。同連合会は事件直後、「安心して堂々と生きて」と全国の障害者に向けたメッセージを公表。「頑張ります」「救われた」など各地から300件以上の手紙や電話が寄せられた。

だが、事件で障害者らが負った心の傷は深い。心理士らと連携し、全国の育成会で心のケアに取り組めないか検討している。

一方、容疑者と同調するような心無い意見も浴びせられた。「『障害者は別の存在』だという意識が社会の底にはまだあるのだと感じる。強者の論理だ。でもそういう人たちもいつ、障害を負ったり、年老いて介護が必要になったりするか分からない。だからこそ、障害がある人もない人も共に安心して暮らせる地域づくりが必要なのに…」

重度の障害者がいたからこそ、日本の障害者福祉は当事者の思いをくみ取り、その願いを形にしようと進化してきた、と久保会長は考えている。「現在の福祉は当事者が作り上げたものであり、『役に立たない』などとは決して言わせない」

「施設の防犯対策の論議が進められているが、障害者と地域との共生に逆行したものとなってはならない」と強調。地域の「目」で障害がある人たちを守ることも必要ではないか―。心のバリアフリーのため「健常者」「障害者」という言葉をなくしていいとさえ思う。

（北川亮）